

序論)

皆さん、おはようございます。

突然ですが、皆さんはご自分の「からだ」について、じっくりと考えたことはあるでしょうか。

私たちのからだは本当に神秘的なものです。科学者たちによれば、人間のからだは数十兆個もの細胞からできているそうです。そして、その一つひとつが、誰に命令されるわけでもなく、絶妙なタイミングで協力し合い、からだ全体を活かしています。例えば、私たちが美味しいご飯を食べて「ああ、美味しいな」と感じている時、胃腸は消化のために働き、血液は栄養を運び、心臓は休むことなくリズムを刻んでいます。もし、その中のどれか一つでも「今日は疲れたから働きたくない」とストライキを起こしてしまったら、私たちは生きていけません。それほどまでに、私たちのからだは精巧に、互いを支え合ってできています。

今日、私たちが開いている聖書箇所、パウロは「教会」のことを、この「からだ」にたとえて説明しています。

私たちは教会に来て、こうして一緒に礼拝を捧げています。でも、私たちは弱い存在なので、時には互いを比較して優劣を考えてしまうことがあるのではないのでしょうか。ある人は、「あの人はピアノが弾けていいな、それに比べて私は何もできない」と落ち込んでしまします。またある人は、「あの人のやり方はおかしい、私が考えるようにしたらいいのに」と、心の中で誰かを裁いてしまっているかもしれません。

そのようにして人と自分を比較して「自分なんて役に立たない」という劣等感を持ったり、「あの人は自分の考えとは違うことをしているからおかしい！」と批判したり、もしくは優越感を持ったりしてしまっていないのでしょうか。

もし皆さんが、そのようなことを今まで教会の中で感じたことがあるのならば、今日のみことばに耳を傾けていただきたいと思います。

今日はこの箇所を通して、私たち教会がどのような存在であり、互いにどのように関わっていったら良いかを教えられていきたいと思います。

1) 教会の基本：私たちは御霊によって一つのからだ

まず、聖書の言葉を読みましょう。12 節と 13 節を読みます。

12:12 ちょうど、からだの一つでも、多くの部分があり、からだの部分が多くても、一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。

12:13 私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。

ここには、教会を理解する上で最も基本的なことが書かれています。私たちは互いに多くの違いがあったとしても一つであり、一つであったとしても違いがあるということです。それは、先ほど説明したような私たちのこの体の仕組みと同じなんだとパウロは言っています。

当時のコリントの教会には、様々な人がいました。ユダヤ人もいればギリシア人もいるし、自由人もいれば奴隷もいました。これは社会的な身分も、文化も、考え方も全く違う人たちが集まっているという事実を示しています。

普通なら一緒になるはずのない人たち、ましてや一緒に食事をするなんてありえない人たちが、一つのところに集められていたのです。

なぜでしょうか。それは「私たちはみな、一つの御霊によってバプテスマを受け」「キリストのからだ」という一つの霊的なからだを構成するものとされたからです。

皆さんがクリスチャンになった時、何が起こったのかを確認してみましょう。

救われた人は、ただ教会員名簿に名前が載るようになったのではありません。聖霊なる神様によって新しく生まれ変わり、イエス・キリストという大きな「いのち」の中に組み込まれたのです。

そして、13節の終わりに「みな一つの御霊を飲んだ」とあるとおり、私たちは同じ神様の霊によって生かされる存在にされました。

だから、私たちの共通点は、趣味が合うとか、気が合うということではありません。性格がバラバラでも、生い立ちが違っても、私たちは「同じ御霊を飲んで」「キリストのからだを共に構成している」存在なのです。

だから私たちは互いに違いがあっても一つの存在だということができます。

2) 劣等感への処方箋：神様が多様な部分を備えられた

しかし、いくら「一つだ」と言われても、私たちはつい人と比べてしまいます。そしてそこから劣等感や優越感を持ってしまうのです。

まずはその劣等感の部分を考えていきましょう。

14節から18節までをお読みします。

12:14 実際、からだはただ一つの部分からではなく、多くの部分から成っています。

12:15 たとえ足が「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません。

12:16 たとえ耳が「私は目ではないから、からだに属さない」と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません。

12:17 もし、からだ全体が目であつたら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が耳であつたら、どこでにおいを嗅ぐのでしょうか。

12:18 しかし実際、神はみこころにしたがって、からだの中にそれぞれの部分を備えてくださいました。

面白い例えですね。足が手を見て、「いいなあ、手は器用で。いろんなものをつかめて。それに比べて私は、ただ体を支えて歩くだけ。埃まみれになるし、食事の手伝いをしたり、何かを作ったりすることはできない。私は手じゃないから、この体にはきっと必要ないんだ」といじけている。そのような例えをパウロは使っています。

教会の中でも同じことが起こります。

「あの人のように人前で立派に祈れないから」

「あの人のように聖書の知識がないから」

「あの人のようにまめに人を訪問してケアすることができないから」

「私はまだ洗礼を受けたばかりだから」

そのようにいって、人と自分を比較して、「だから自分は、この教会には大して必要のない存在なんだ」と思ってしまう。これは、洗礼を受けたての人や、新しくその教会に来たばかりの人が感じやすいことです。

しかし、パウロははっきりと否定しています。

「あなたがそう言ったとしても、それで、その体に属さなくなるわけではない」と。足がどんなに「自分は手とは違う」とすねても、その足は体にとって必要な存在です。耳がどんなに「自分は目じゃない」と言ったとしても、その耳は必要な存在です。

もし体の全部が手だけで構成されていたり、目だけで構成されていたとしたら、それは不完全で奇妙な存在です。日本の妖怪で百目という体中に目がある妖怪がいるようですが、目だけとか手だけという存在は不自然で、言い方が悪いですけど気持ち悪い存在です。体には色々な種類の部分があつていいし、そうでないと健全ではないのです。

だから、人と自分を比べて劣等感を持ってしまう人にこそ、18節のみことばが語りかけています。

12:18 しかし実際、神はみこころにしたがって、からだの中にそれぞれの部分を備えてくださいました。

皆さんが持っている今の役割、今の性格、今の賜物、今の能力、それは偶然ではありません。神様が「みこころにしたがって」、つまり神様が「今のその状態が一番いい」という判断の中で、皆さんに今の役割や性格や能力を与えてくださったのです。ですから、「あの人と比べて私なんて」と嘆く必要はないし、もしそれをするならば神様の知恵とご判断を否定することになってしまいます。

だから、どうか、神様が与えてくださったありのままの自分を否定しないでいただきたいと思います。神様はあなただからこその役割や働きをあなたに与えてくださっているのです。他の人と同じことができなくてもいいのです。

3) 優越感への処方箋：弱い部分ほど大切にされる

さて、コリントの教会には劣等感とは逆の問題もありました。それは「優越感」という問題です。「自分はできる、自分は役に立っている。でもあの人はできていない」という、人や教会を批判する思いです。

まずは 19 節から 22 節を読みましょう。

12:19 もし全体がただ一つの部分だとしたら、からだはどこにあるのでしょうか。

12:20 しかし実際、部分は多くあり、からだは一つなのです。

12:21 目が手に向かって「あなたは知らない」と言うことはできないし、頭が足に向かって「あなたがたは知らない」と言うこともできません。

12:22 それどころか、からだの中ではかより弱く見える部分が、かえってなくてはならないのです。

(21 節表示) 目が手に向かって「お前は知らない」と言う。これはまさに高慢です。このようなことは、自分とは違う相手も同じキリスト体を作り上げている大切な存在なんだということがわかっていけば言えないはずですが、でも、その人と自分を比べて、相手の方が間違っている、弱いところがある、そう思うと、人は簡単に相手のことを批判したり、見下したりしてしまうことがあるのです。

でもパウロは言います。「その劣っていたり、弱いと見えたりする部分こそが大切なんだよ」と。23 節、24 節を読みましょう。

12:23 また私たちは、からだの中で見栄えがほかより劣っていると思う部分を、見栄えをよくするものでおおいます。こうして、見苦しい部分はもっと良い格好になります。

12:24 格好の良い部分はその必要がありません。神は、劣ったところには、見栄えをよくするものを与えて、からだを組み合わされました。

22 節「弱く見える部分」、23 節「劣っていると思う部分」というのは、多くの聖書学者たちによると、私たちの体の「内臓」や、人前で見せることが恥ずかしい部分、具体的にいうとそれぞれの性器や排泄に関わる部分のことだろうと言われています。

考えてみてください。私たちは、顔や手は人前に出しています。だから、これらは今日の箇所でいうと「格好の良い部分」です。しかし、人に見せるのは恥ずかしい部分はどうかというと、服を着て見栄えをよい状態にします。そして、そういった衣服で覆って隠すことによって、その恥ずかしい部分を守ります。

なぜなら、それらの部分は、生命を受け継いだり、体の中から老廃物を出したりするために、極めて重要な部分だからです。

多く的人是、目立つもの、強いもの、美しいものや、素晴らしい結果を出したり、評価できるような言動をする人を賞賛します。

しかし聖書は、教会の中で「弱く見える人」「見栄えがしない人」、あるいは「人には言えない傷や恥を抱えている人」を、不必要な存在として切り捨てるのではなく、むしろ、そうした弱い部分にこそ、愛という衣服で優しく覆い、大切にすべき存在だと教えています。

皆さん、教会の中で、もし皆さんが「あの人は弱いから」「あの人は問題があるから」「あの人はこれができないから」「この教会はこれができないから」といって、その人や教会を批判する思いを持っているとしたら、それは大きな勘違いです。たとえば、皆さんの目から見てあの人は「隠さなければいけない」とか、「もっと奉仕ができるように変わらなければいけない」と思えるような人であったとしても、その人は教会にとって必要な存在であり、その教会に属するあなたにとっても必要な存在なのです。

だから、私たちは、そのような人たちこそ守り、そのような人たちと一つになっていくように、自分が持っている賜物を用いて支えていかなければならないのです。

結論) 実践：キリストのからだとして生きる

だからパウロは、25 節から 27 節の箇所で今日の結論を述べています。25 節から

27 節を読みましょう。

12:25 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いのために、同じように配慮し合うためです。

12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。

12:27 あなたがたはキリストのからだであって、一人ひとりはその部分です。

私たち教会が、自分とは違う人たちとどのように関わっていったらよいのか。それは互いを批判し合って分裂するのではなく、むしろお互いを立て上げるために配慮し合っていく。自分とは違う人を生かすために、自分が持っている賜物を用いていく。それが大切なんだよとパウロは言っています。

皆さん、ダンスの角に足の小指をぶついたりしたことあるでしょうか？ 私は何回かあります。足の小指をガーンってぶつけるとどうなりますか？ とても痛いですよ。ね。ぶつかっている部分は足の端っこにある小指なのに、体全体が痛いと感じて、口から「痛い」という叫びが出てしまいます。それは小指の痛みを体全体で共有しているからです。逆にもし小指をガーンってぶつけているのに他の部分が痛いと感じないならば、それはその体がどこかおかしい証拠だと言えます。

だから私たち教会がキリストの体として健全で健康な状態を保っているためには、教会の誰かが悲しんでいたたり苦しんでいたたりするのを見たならば、それは私たち教会全体で、その痛みや悲しみを分かち合っていくことが大切なのです。そのためには同じ教会の兄弟姉妹の痛みや悲しみ、苦しみを共有し合っていく配慮が必要です。

皆さん、同じ教会にいる兄弟姉妹が今抱えている課題をご存知ですか？ いろいろな事情があって、ここ 2 年ぐらいは祈りのノートを作ることができていませんが、私たちは今、皆さんの隣に座っている人がどんな祈りの課題を抱え、どんな困難を持っているのか、それを知って、祈り合っていくことが必要だと思います。だから、ぜひ祈祷会に参加してほしいのです。祈祷会で互いの課題や弱さを分かち合って支え合っていく。それがやっぱり私たちには必要なことなのではないでしょうか。

また痛みだけではなく喜びも分かち合うのだということが聖書には書かれています。長年祈っていた祈りの応答、病からの癒しを祈っていて、その祈りが聞かれたことの証しがあったり、将来の道が開かれるように祈っていて、その祈りの応答があったという証しなど、そういう祈りの応答を分かち合って、互いに喜び合っていくということも、私たちには必要なことなのではないでしょうか。

これも祈禱会でできることですし、食事の交わりなどでもできることだと思います。まずは配慮し合うために互いに交わりを持っていくということが私たちの教会には必要です。そして、交わりの中で相手にできなくて自分ができることを知ったならば、それを実践して助けていく。それが教会にとって必要なことなのではないでしょうか。

そしてそのように支え合うために、私たちにはそれぞれに違った賜物や役割が与えられているわけです。28 節から 30 節を読みましょう。

12:28 神は教会の中に、第一に使徒たち、第二に預言者たち、第三に教師たち、そして力あるわざ、そして癒やしの賜物、援助、管理、種々の異言を備えてくださいました。

12:29 皆が使徒でしょうか。皆が預言者でしょうか。皆が教師でしょうか。すべてが力あるわざでしょうか。

12:30 皆が癒やしの賜物を持っているでしょうか。皆が異言を語るでしょうか。皆がその解き明かしをするでしょうか。

28 節以降では、使徒、預言者、教師といった役割が挙げられています。

そして全員が使徒になるわけでも、全員が預言者になるわけでも、全員が教師になるわけでもありません。

誤解しないでいただきたいのは、ここで第一に使徒、第二に預言者、第三に教師たちといって、そしてそれ以外の「力あるわざ」「癒し」「援助」「管理」というものには数字が与えられていませんが、これは優先順位を示しているわけではありません。これは初代教会を建て上げるために神様が順番に教会に与えていった人たちの、その順序を言っているだけであって優劣ではないのです。

まずは主イエス・キリストによって使徒が立てられ、そして神様の御言葉を語る預言をする人たちが初代教会にも与えられ、そしてその語られた教えをさらに他の人たちに教える教師たちが立て上げられていったという順序をパウロは語っています。これは優先順位ではありませんが、教会はまず、使徒や預言や教師たちによって与えられた「主の教え」によって基礎が据えられて、その上に奇跡や援助の賜物、管理の賜物、異言の賜物というものが加えられていったのだという、その教会が建てられた順序は理解する必要があると思います。

教会は主の言葉、主の教えなしには成り立ちません。その上で様々な賜物を一人一人に与えられて、互いが配慮し支え合って一つになるように、神様はこの教会を建て上げてくださったのです。

だからこれが逆になってはいけないのです。奇跡や癒し、もしくは異言、そういうものをまず求めて、主の御言葉や主の教えに立つということを後回しにする、この順番はやっぱりいけないと思います。

だから、正しい順序を理解した上で、私たちは主の御言葉、主の教えを第一にし、その上でそれぞれに与えられた賜物を用いていく。それが健全な教会として私たちが立っていくために必要なことだと言えるのではないのでしょうか。

最後に 31 節を読みましょう。

12:31 あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。私は今、はるかにまさる道を示しましょう。

ここでパウロは「より優れた賜物」を熱心に求めるように教え、さらには私が「はるかにまさる道」を示しましょうと言っています。これは何でしょうか。

これについては、次の 13 章の部分で具体的に教えられたいと思います。

次回のメッセージに期待しつつ、今日はまず、神様は私たちを別々の違う存在として創られ、その上で互いに配慮し合い支え合う一つの存在として創られたということを感じていきたいと思います。

私たちは、人と自分を比べて、そこに劣等感を持つ必要はないし、さらには自分の目から見て他の人に弱いところや足りないところが見えたとしても、それに対して優越感を抱いたり、批判する必要はありません。私たちは互いの違いを受け入れ、その上で、兄弟姉妹の苦しみや喜びを分かち合って、互いに配慮し合っていく。それが健全な教会のあり方だと教えられました。この教えに従って、互いに配慮し、それぞれの賜物を用いて支え合っていく教会になっていきたいと思います。

お祈りします。

愛する天の神様。

あなたの深い知恵を感謝します。

私たちは自分と他人を比べ、落ち込んだり、高慢になったりする者です。

しかしあなたは、私たち一人ひとりを、キリストのからだのかけがえのない一部として選び、配置してくださいました。

どうか、私たちが互いの違いを認め合い、弱い部分を大切にし、共に痛みと喜びを分かち合う教会となれますように。

主イエス・キリストの御名によって、お祈りいたします。
アーメン。